

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391100098		
法人名	社会福祉法人 順風会		
事業所名	グループホーム 西城園		
所在地	熊本県宇土市戸口町906		
自己評価作成日	平成28年11月2日	評価結果市町村受理日	平成28年12月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺6丁目41-5
訪問調査日	平成28年11月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

集落の中にあり、近所の方もいつも声掛けできる距離にある。海岸にある為台風などの自然災害には早めの対応が必要で、今年も法人内の特養へ全員避難を実施した。避難の際は地域の区長さん民生委員さんにも連絡をし、家族の協力もあります。避難後の見回りは区長さんがして下さったり地域との連携も取れています。地域の運動会や祭りなども参加して、地域の皆さんにも認知頂けていると思います。毎月ボランティアの方にもフラダンスなども披露して頂いて、利用者の方も顔見知りの方の踊りなどを楽しみにされている。終わった後のおしゃべりも楽しみのようです。ホームの中では自由に過ごして頂き、気候の良い時は近所への散歩も楽しんでもらっています。本体の特養のイベントへの参加や年1回の西城園祭にはご家族の協力もあり、自慢の作品の展示もしていただきました。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の繋がりの強い環境の中で高齢者のよりどころとしての施設運営を目指している。利用者の家族にはなれないが、利用者に近い距離で居たいとの施設長の思いを基に、職員は自分の親と同じような気持ちで関わっている家族的な雰囲気グループホームである。地域の中でただ一つのホームとして地域の縁側を目指し、情報の発信や地域の避難所としての役割を常に意識し、地域貢献に努めている。運営推進会議で今後の地震対策についての意見交換を行い、ホームの安全確保や母体施設との連携について話し合う等の努力が伺えた。「一人ひとりの今を大切にします。安心安全な暮らしをチームで支えます」などを理念として掲げており、職員の丁寧な言葉掛けや対応にその姿勢が表れている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	グループホーム独自で全員で作成し、それに基づいたケアを行っている。	設立1年目は「法人」の理念をホームの理念として掲げていたが、1年後、1年間のケアの体験を踏まえ、ホーム独自の「理念」を検討。職員が介護を行なうに当たって、いつも心がけられるもの・遵守できるものと全職員で考えて「理念」として掲げ、共同生活の場として「今」を大切にしたいケアを心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域とのつながりは、地域の方々から行事に招待があるようになり、その時々で参加している。法人本体の行事に参加するようになり、グループホームの認知度が上がり、地域の皆さんの訪問も増えてきている。定期的なボランティアも増えてきている。	「地域密着型事業所」としての機能を大切に、地域との交流に力を入れている。区長や地域住民も運営推進員として、災害時の安否確認・見回り等や各種イベントへの参加等の協力がある他、ボランティアも積極的に受け入れている。また、ホームが1家族として町内会に加入し、地域の行事へ参加したり、年に1度の「西城園祭」には多くの地域住民の参加を得ている。ホームの部屋を利用した「地域の縁側」としての開放も計画し、誰でも立ち寄れるホームを目指している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「西城園新聞」や状況報告書で情報を発信するとともに、見学や相談があるときは入居以外のことでも気軽に相談してもらえるような対応を心がけている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ご家族・区長・老人会会長・地域包括支援センター・行政・地域の方などに参加して頂き、サービス内容や事故報告などを行うとともに、自然な会話から、ご家族の意見を引き出せるような談話の時間を作っている。	運営推進会議は、区長・民生委員・地域代表・老人会長・各ユニットの家族代表・行政・包括の出席を得て開催されている。ホームからの詳細な入居状況と行事報告、事故・ヒヤリハット報告、職員研修の説明等の後、活発な質疑応答が行われている。年6回の会議資料は各委員の個別ファイルに綴じられ、当日は前回の資料も見ながら活発な意見交換が行われており、全委員が積極的な関わりの気持ちを持ち、参画されていることが伺えた。利用者の日常を撮った写真も「西城園便り」で紹介され、委員の理解を深めるための努力が見られた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	包括。行政等からの要請もあり、困難事例の利用者の受け入れも積極的に行っている。	運営推進会議への参加や情報の提供など、市行政と密に連携を取り合い情報の共有に努めている。行政からの、困難ケースの利用者受け入れ要請も積極的に受け入れて介護に努める等、信頼関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体状況を共有し、事故予防の目的で利用者にとって、どの方法が一番のケアに繋がるか、その場合は拘束になるか？を常に話し合い、家族の理解を得てから、現状を報告して、拘束にならないように努めている。	身体拘束について勉強会を実施し、トイレ誘導や入浴など全てに「同意と確認」を得ることを基本としている。丁寧な声かけや言葉遣いを心がけ、抑制せず自由な行動を見守る体制ができている。センサーマット等は使用しておらず、布団に鈴を付け音で判断し、なかなか寝付けない方には落ち着かれるまで付き合う等の取り組みが行われている。また、拘束廃止の外部研修等にも積極的に参加している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と高齢者虐待は職員がもっと勉強が必要だと痛感している。外部研修に参加し、法人も合わせたところで復講も行い、職員の意識向上に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	後見人制度など必要な方には口頭で説明をしている。今年度は成年後見人制度利用の方も的に受け入れた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や解約の際はもちろん、改正の際も十分な説明を行っています。その際に不安や疑問が発生した場合は説明し、理解していただけるように努めています。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置しているが、苦情等をいただいたことはない。常に面会の時にご家族と会話し、信頼関係の構築に努めている。	運営推進会議に各ユニットの代表者が出席しており、家族からの発言・提案に対応して食事の形態を変えたり、居室の移動をする等、ケアへ活かしている。面会は多く、家族と一緒にの外出や外泊も多い。面会の折には利用者の状況を説明し、家族の安心に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月職員会議を行って、全職員が利用者の情報を共有を図り、職員間の関係づくりを行っている。	2ユニットの合同会議を月1回開催し、日常のケアについての話し合いを行ない、共通理解を得る機会としている。合同会議終了後、各ユニットでミニカンファレンスを行ない、ケアの統一を図っている。職員の提案は、まず1ヶ月取り組んでみて検討するなど、よりよいケアに繋げる努力が行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	定期的(6ヶ月に1回)や問題発生時に所長がヒヤリングを行って、職員の不満や要望を聞き、法人に相談しながら、できる限り意欲が向上できるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを	研修の機会を多く持ち、キャリアアップ研修・資格取得のために研修等を積極的に受講させ、費用の補助も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会では、管理者同士が意見の交換の場があり、情報の交流が出来てネットワークが構築されている。連絡協議会主催の合同の勉強会も定期的に行われており、職員同士が勉強会を通じて、さらに交流を深め、サービスの質の向上に努めている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者が「どうしたいのか？」を常に考え、言葉や表情から読み取れるような関わりを持ち、初期段階では慣れていただくまで、その方を知る・という視点からご家族にも協力していただき、見守り・ケアに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用初期の段階で家族の意見を時間をかけてきとりを行い、相談しやすい県警づくりに努めている。面会の時等は必ず管理者が聞き取りを行い、不安等の解消に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族にお便りを使って、近況報告を行い、変化があれば受診等の対応を行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来る作業は職員がするのではなく、利用者と一緒にやっている。(たとえば、食事の準備・洗濯物たたみなど)		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	受診など可能な限り、ご家族に同行して頂くようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	少し遠くても面会や電話等でも交流が出来る環境を支援している。	地区に一つのグループホームであり、地域貢献を目指し、近隣の高齢者が気軽に立ち寄れる雰囲気づくりを心がけている。馴染みの場所へのドライブや自宅訪問・買い物の他、食材の配達等でホームを訪れる人との交流もあるなど、地域の人と触れ合う機会づくりに努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が交流スペースのソファーに座り、かみ合わない会話であるが、それぞれ楽しく会話が出来た環境を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	グループホームだけでは退所後の交流は難しいが、法人の行事等へのお誘いを行い、退所後の関係を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族の意向も十分に聞き取りしたうえで、利用者本位の考えに基づいて思いやりや意向を家族と交友している。	入居時の聞き取りを大切に、まずは1ヶ月間のプランをたてて生活していく中から、好きな事などを把握し、本人の意向を大切に対応している。無理強いせず本人の得意分野の情報を収集し、やりたいことをやってもらうよう環境整備等に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族から情報収集するとともに、本人と普段の会話の中から、生活歴を把握し、日常の支援につなげている。得られた情報は記録に残し、職員間で共有し、ケアに役立てている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者の生活歴を踏まえた上で、今の心身の状態に合わせた支援を行っている。一日の過ごし方や身体の状態・行動の状態を十分に観察し、職員同士が情報の共有に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の職員会議や日々のミーティング・申し送りや現状や困難事例を話し合い、意見を出す事でチームとして統一したケアにつなげています。また、家族と話す機会に加え、状態に合わせて医師の意見も取り入れたカンファレンスを実施している。	職員会議やミーティングでミニカンファレンスを実施している。利用者個々に担当者が決められており、「つぶやきノート」に記載された職員の気づきを基にカンファレンスを実施。家族や医師の情報も得て3か月毎に評価とアセスメントを行い、「つぶやきノート」の内容とともに利用者に応じたケアプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	PDCAサイクルを行い、介護計画の見直しもスムーズに行えるようにしている。ケアプランに基づく記録を行い、ご本人からの訴えや態度なども記録に残し、職員間で情報を共有するようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	生まれてくるニーズに対応できるように、普段から様々な視点で観察し、ご家族と相談・協力しながら支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議などを活用し、地域資源の把握に努めている。入居者の方が地域住民の一人として活躍できるように、地域行事に参加したり、ボランティアを受け付けている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医の往診または歯科医・歯科衛生士の訪問も行われている。症状に応じ、専門医への受診の支援も行っている。	月1回は協力医の往診を受けており、歯科・口腔衛生士の訪問も行われている。専門医の受診は必要に応じて家族や職員の同行によって実施している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常の関わりの中で気付いたことは、看護師へ報告し、適正な指示を受けている。利用者の健康管理・服薬管理を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院時にかかりつけ病院より情報提供を頂き、日常生活の情報などを集め、入院中は職員も面会に行くなどして退院時がスムーズに行くように行っている。入院時は日頃の様子など病院に伝え治療に役に立つようになっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に当ホームで出来ること、看取り期の説明を行っている。時期が来た段階で家族・管理者・看護師とカンファレンスを行い、協働してより良い看取りが出来るようにしている。	看取りを行なう方針で、入居時に説明も行き看取りに備えているが、医療連携のあり方に苦慮している。本人・家族の意思を尊重し、良い看取りができるよう、十分なカンファレンスの実施や職員研修による意識づけ等、支援体制の構築に努力している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急連絡網を活用し、管理者へ連絡を行い、その指示のもと駆けつける体制をとっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	実際に台風の時は法人への早めの避難を数回実施した。その場合、地域の主要な方々への連絡と協力を行った。	今年度は、地震・台風により母体特養施設へ3回避難している。消防・警察・家族へ連絡し、協力依頼や家族の安否確認を行い、地域からの支援も多く得られている。推進会議で今後の地震対策についての意見交換を行い、ホームが安全であるなら地域の避難場所としたいとの意見もあり、地域全体での行動も検討課題となっている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者お一人おひとりの人格を尊重しながら、個々に合わせた対応を行っている。その方の人格を受容し、状況に合わせた言葉掛けで、安心していただくケアに心がけている。処遇委員会を通して、啓蒙活動を行っている。	利用者一人ひとりの生活歴に合わせて、その人の思いを尊重し寄り添いながらのケアを心がけている。母体特養の処遇委員会に参加し、「認知症」の理解に努めており、自分が嫌だと思うことは言わない等、言葉かけにも留意し、職員同士、お互いに注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の様々な場面で、利用者の気持ち、考えがあつての行動になるように、選べる行動を提供して支援している。言葉で選択できない利用者に対しても表情や感情に注意して、利用者の気持ちを汲み取れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ある程度の日程は決まっているが、お一人おひとりのペースに合わせ、お本人様の意志に沿うよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご自分の好みの服を選ばれたり、着用される方には、おしゃれを楽しんで頂いている。介助を要する方が多いために、身だしなみには配慮し、その人らしい身だしなみに支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	お一人おひとりにあった食事形態を提供している。又、ご要望があれば、都度、対応できるようにしている。準備や配膳などできる方にはお手伝いして頂いている。4~5名の方には、準備等には利用者に手伝ってもらっている。	母体特養の管理栄養士が作成したメニューで、ホーム職員が調理している。巻き寿司作りの上手な利用者を中心に、職員と一緒に食事づくりを楽しむこともある。利用者の状態に合わせた刻み食やミキサー食を提供している。10時と3時を水分補給タイムとするなど、水分確保には十分留意している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の普段の食事摂取量を把握し、足りない時は間食で補って、栄養の確保をしています。水分量も利用者の普段の摂取量を把握し、脱水にならないように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアをを確実にやっている。自分で出来ない方は介助している。定期的に訪問歯科衛生士に口腔内の観察・ケア・義歯調整をしてもらい、口腔ケアには特に力を入れている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定期的トイレ誘導ではなく、排泄パターンを把握し、言動や行動からトイレのタイミングを察知し、健康・食事・水分摂取などを把握し、出来るだけトイレで排泄していただく支援をしています。	排泄チェック表でパターンを把握し、トイレ誘導を行なっている。夜間ポータブル利用の人やパット・リハビリパンツ使用の人等、一人ひとりの状況や昼夜に合わせて対応し、自立支援に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	疾病に影響を及ぼす方や慢性の便秘症の方も多い為に、個々に看護師からかかりつけ医に相談している。水分量の確保が難しい方には、飲み物など種類をかえて提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	予め予定は作っていますが、そのときの希望や状態に合わせて、入浴していただいている。入浴は1対1で行い、湯船の中でゆっくり話される雰囲気を作り、歌や談話・時には悩みを打ち明けられる場所になっている。湯船に花びらを浮かべたり、菖蒲を入れたり、季節のお風呂も楽しんでいただいている。	入居者の希望を尊重し、週2～3回、マンツーマンでの入浴支援を行っている。一人ひとりお湯を入れ替え、時には浴槽に花びらを浮かべたりゆっくりと会話を楽しむなど、心身共にリラックスした時間となっている。浴槽に浸かれない人は身体にタオルを掛けお湯の掛け流しで対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の健康状態に合わせて睡眠状態を把握し、休息を取っていただいている。静かな居室ばかりが安息の場所ではなく、人の声が聞こえるリビングのソファで休んで頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	お薬手帳や処方箋を管理し、いつでも情報が得られるようにしている。処方変更時は看護師より伝達があり、情報を共有し、症状の変化を確認・報告している。伝達。服薬までに二重のチェックを行い、飲み込まれるまで職員が確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の能力に合わせてそのやり方が継続できるよう支援しています。野菜の皮むきなどは家事をいていた婦人であればどなたも経験済みである為に、包丁を使って気分転換野菜の皮むき・カットを行われている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の花見など大型自動車で外出する事も多く、集団で外出する事もあるが、利用者お一人おひとり一人の生活歴や嗜好に合わせている。ご家族の支援も得て、外出に出かけられるような支援もある。	日常的に近隣の散歩や宇土マリーナ等への買い物・家族との外食・美容院等への外出など実施している。ドライブや花見・紅葉狩り等、可能な限り外出の機会を多く作り、閉じこもらない支援を心がけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の了解の下に、現金を事務所で預かりしている。必要に応じて、職員と一緒に外出して、自分でお金を支払い、希望のものを買い物できる支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者の希望時に電話を使用させていただいている。自分でかける事の出来ない利用者には、職員が代わりにかけたり、伝言したりの支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間は、入居者が食事をしたり、休息をしたり休息を取ったりなど、長時間過ごし交友の場所でもある為に、室温や環境整備に配慮し、居心地よく過ごしていただけるように努めている。	玄関を入ると正面に事務室、左右に珊瑚と瑠璃、同じつくりのユニットがある。広いフロアでは、利用者と職員が木製の大きなテーブルを囲んで、好きな飲み物で会話しながら楽しいお茶の時間、穏やかな時が流れていた。海が見える窓側にはゆったりと座れるソファが置かれ、広い壁には入居者の作品が飾られており、2ユニット共ゆったりと思いの場所で寛げる落ち着いた空間が作られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	なじみの顔ぶれで、利用者同士で仲良く腰掛けて楽しい会話ができるように、座席の配置工夫している。利用者同士で座ることに安心されたり、自由にそのときの状況にあった場所を選んで頂き、選べるように心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅で使用していた家具や身の回りのものを持っていただく事で、入居時の不安を少しでも軽減するようにご家族と協力しながら配慮している。。ご家族との写真や手芸作品を飾られ、おひとりお一人の温かみのある居室になっている。	居室の入口には、1番地・2番地の表示とともに、利用者の笑顔の写真が飾られている。壁際には造りつけの棚があり、写真や花・人形などが飾られ、使い勝手の良い作りとなっている。家族の作品である能面が飾られた部屋や、入居者の描いた本格的な絵が飾られた部屋など、一人ひとりの家としての部屋づくりが伺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内は全てバリアフリーの建築であり、廊下に手すりの位置も工夫されている。方麻痺があってもどちらかのトイレの手すりを使って排泄が出来るようになっている。		